

18 十二指腸潰瘍穿孔例の検討 (H. Pylori 除菌治療も含めて)

山田 明・阿部 要一・横山 恒*
摺木 陽久*・佐藤 秀一*

木戸病院外科
同 内科*

1997年5月より2005年12月までに経験した十二指腸潰瘍穿孔例は40例41件であった。保存的治療が27例28件に、保存的治療から外科治療への移行が3例、外科治療が10例におこなわれた(胃切除2例)。合併症は保存的治療群において横隔膜下膿瘍、肝膿瘍の2例、外科治療群においては後期の腸閉塞2例、胃切除後吻合部潰瘍1例、腹腔内膿瘍1例が発生した。経過観察が行なわれた26例(胃切除例を除く)において、十二指腸潰瘍の再発は1例であり、治療を中断した再穿孔例であった(HP未検索)。HPが検索された18例の陽性率は88.9%と高かった。HP陰性例およびHP除菌失敗例にはH2 blockerの維持療法を、除菌成功の7例に無治療経過観察、2例に維持療法を行ない良好な成績であった。

19 H. pylori 除菌を行った cap polyposis の1例

佐藤 知巳・岡 宏充・稲田 勢介
波田野 徹・富所 隆・吉川 明

厚生連長岡中央総合病院消化器病
センター内科

症例は64歳の女性。難治性の下痢を主訴に近医を受診。注腸検査にてS状結腸を主体とする隆起性病変を指摘されて当科に紹介された。内視鏡検査にて直腸～横行結腸におよぶびらんと小隆起を認めた。整腸剤やサラゾピリン内服後も症状は消退せず、腹水や浮腫も出現したために入院。高カロリー輸液およびアルブミンの投与を行ったが、著明な低蛋白血症は改善せず、分類不能型大腸炎としてステロイド治療を開始したが無効であった。その後隆起性病変に対して粘膜切除術を施行し、病理組織所見にてcap polyposisと診断した。フラジール内服を開始したところ症状、検査

所見ともに改善した。尿素呼気試験にてH. pyloriの存在が確認され、ランソプラゾール、アモキシシリン、クラリスロマイシンによる除菌療法を行ったところ、大腸の隆起性病変、陥凹病変ともに消退した。さらに胃にみられた多発性ポリープや鳥肌様の小顆粒状隆起も消退した。

20 H. pylori と鉄欠乏性貧血 — 特に鳥肌胃炎に注目して —

佐藤 祐一・小林 正明*・河内 裕介*
塩路 和彦*・合志 聡*・横山 純二*
竹内 学*・佐々木俊哉*・杉村 一仁*
成澤林太郎*・青柳 豊

新潟大学大学院医歯学総合研究科
消化器内科学分野

新潟大学医歯学総合病院光学医療
診療部*

【目的】H. pylori 感染患者では低フェリチン血症や鉄欠乏性貧血になることが知られており、われわれはこれまでH. pylori 感染者のうち前庭部結節性胃炎(Antral nodular gastritis; ANG)患者および胃過形成性ポリープ患者が低フェリチン血症を呈し、特にANGでは鉄吸収抑制ホルモンであるhepcidinが上昇していることを明らかにしてきた。今回、消化性潰瘍患者を含め症例数を増やし、hepcidinと血清鉄やフェリチンとの間の相関関係の有無や、除菌によりhepcidinの産生量に変化しうるかについて検討した。

【方法】H. pylori 感染を確認したANG患者20名、十二指腸潰瘍(DU)患者50名、胃潰瘍(GU)患者40名、およびH. pylori非感染正常患者31名、計141名を対象とし、血清中の鉄、フェリチン、およびhepcidinの前駆体であるprohepcidinの値を測定し、各疾患群間で比較し、さらにANG群11名、GU群5名、DU群27名に除菌を行い、prohepcidin値の変化を観察した。

【結果】ANG群は、血清prohepcidin値は4群中最も高く、他の3群に比して有意に高値であり、血清鉄と有意な負の相関関係を示した。一方、GU群、DU群のprohepcidin値は非感染者群より高